

1-2 2007 年度の研究経過

(1) 国土地理協会の助成

継続して国土地理協会より助成をいただいた（助成金額は 200 万円）。つぎに述べるように 2007 年度は科学研究費が採択され、研究の中心はこの科研費ですすめるが、とくに外邦図研究会関係の費用については、国土地理協会の助成金を使用することとした。

(2) 科学研究費の採択

2006 年秋に申請した科学研究費（基盤研究（A）「アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成」代表者：小林 茂、平成 19 年度の直接経費 870 万円）が採択された。

またあわせてデータベース科研（「外邦図デジタルアーカイブ」代表者：今泉俊文・東北大学教授、790 万円）も採択され、両者が連携しながら作業を進めることとした。なお、基盤研究だけでなくデータベース科研も 2006 年度には不採択となっていたので、本格的な作業の再開が期待され、東北大学の外邦図のスキンを終了するとともに、そのかなりの部分のウェブ公開をおこなうこととなった。

(3) 室賀信夫氏の個人資料の研究の開始

故室賀信夫氏（1907-1982）は、戦前・戦中期に京都大学地理学教室で助教授をつとめ、同教室を中心とする地政学グループで重要な役割を果たしたことがよく知られている。同氏の収集資料（古地図など）が京都大学図書館に収蔵される一方、個人資料は同文書館に収蔵された。後者には上記地政学グループに関する一次資料（報告書や書簡）が含まれており、その活動を知るには不可欠の資料である。私たちは、すでに第二次世界大戦末期に東京在住の地理学者を中心に参謀本部が組織した「兵要地理調査研究会」について、その基本資料を刊行しており（『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』2005 年）、やはり軍と密接に関係しつつ活動をおこなったこの地理学者グループの理解を深めておくことは重要な意義をもつと考え、この資料の閲覧を開始した。

(4) 外邦図研究打合会の開催

科学研究費採択をうけて、2007 年 6 月 24 日にお茶の水女子大学文教育学部 711 教室で打合会をおこなった。

出席者（敬称略・順不同）：

田村俊和、今泉俊文、李 虎相、関根良平、山本健太、長谷川孝治、今里悟之、鳴海邦匡、岡本有希子、渡辺理絵、田中宏巳、石原 潤、山本晴彦、上田 元、山近久美子、星川圭介、宮澤 仁、村山良之、小島泰雄、源 昌久、小林 茂

外邦図・日本軍撮影の空中写真・戦前・戦中期の気象観測資料の調査に関する打ち合わせのほか、外邦図デジタルアーカイブの整備に関する打ち合わせ、お茶大での外邦図のスキュン作業に関する打ち合わせなどをおこなった。また「京都大学東南アジア研究所における外邦図整理状況」と題する報告（同研究所研究員の星川圭介氏による）のほか、2003 年 9 月にアメリカ議会図書館でスキュンされた日本軍撮影の空中写真の標定作業経過の報告もおこなわれた（阪大院生の岡本有希子さんによる）。さらに山本晴彦・山口大学農学部教授（農業気象）から、戦前期の旧満州における気象観測資料のデータベース化とそれにもとづく温暖化の研究が紹介された。

(5) 高木菊三郎旧蔵資料の購入

東京の古書市「明治古典会」に、戦前から戦中にかけて外邦図の目録作成などにあたった高木菊三郎の旧蔵品が多数出品された（『平成 19 年 明治古典会七古書大入札会目録』）。そのうち中国大陸の外邦図整備に関する手書き地図および刊行図（上記目録の 1995 号「外邦図一覧図・目録・資料」で、高木菊三郎によると思われる作業のあとがみられる）にくわえ、日本本土および植民地の地図一覧図と凡例一覧図（上記目録では 1857 号「地形図記号・図式一覧表」）のコレクションを京都の古書店、臨川書店を通じて購入した。両者はいずれも大阪大学人文地理学教室に収蔵するが、早急に目録を作製しニューズレターに掲載するとともに、デジタル化して、可能な物から公開していくことにした。

(6) 第9回外邦図研究会の開催

2007年10月27日～28日、大阪大学で開催した。

出席者（敬称略、五十音順）：

石原 潤・今井健三・今里悟之・上杉和央・上田元・牛越国昭・岡本次郎・郭 俊麟・加藤敏雄・川端幸夫・魏 徳文・河野泰之・小島泰雄・小林茂・司馬愛美子・清水靖夫・鈴木純子・田中宏巳・田村俊和・長岡正利・長澤良太・中村威也・鳴海邦匡・星川圭介・源 昌久・村山良之・山近久美子・山本健太・山本晴彦・楊 普景・渡辺理絵

〈10月27日（土）〉

13時30分より、中庭会議室にて開催され、以下のような発表が行われた。

①岡本次郎（北海道教育大学名誉教授）：「外邦図の東北大学への搬入経路をめぐって」

本土空襲が始まっていた1945年4月に、第1回生として東北大学理学部地理学教室に入ってから、戦争末期、敗戦、占領という大きな時代の転換の中で、極めて密な先生方や学生相互の交流があったことや、田中館先生との思い出について語られた。

とりわけ、敗戦後に市ヶ谷の大本営陸軍部で手伝った、地図の受領の話は興味深い。先生は、閉業処理中のこの施設に赴き、参謀に大量の地図（大半は諸外国の地形図）の寄贈を求め、地図の選定をはじめ作業を学生に任せた。当初、作業にあたったのは学生2人で、西神田の借家から大本営までリヤカーを曳いて、図一種ごとに数枚ずつ抜き出して積み上げ、集めた地図を神保町に先生が借りた建物の一室に運んでいた。

当時、東北大学地理学教室の助手就任予定の土井喜久一氏の回想録によると、まもなく大量の地図を計画的に運び出す作業に移ったそうだ。多田文男先生と相談して資源科学研究所からは中野尊正氏その他、東北大学から岡本、福井英夫、三田亮一など、気象部の元軍属の女子など10名足らずで、図一種ごとに10枚ずつ抜き出し、その場で梱包して積み上げ、最後は運送業者が直接東北大学の地理教室に送った。仙台へ送った地図は鉄道貨車1両に近く、資源研に

は同量をトラックで2回運んだという。

市ヶ谷～神田へのルートを示す地形図を用いながら、外邦図の搬入について生き生きとした説明が加えられた。



写真1 岡本次郎先生の説明

②魏 徳文（南天書局、台北）：「清末と日本統治初期の台湾地図について」

1684年に台湾が清国の版図に組み込まれてから、日本に統治される19世紀末までの台湾に関する多数の地図を披露していただいた。

康熙帝に命じられた宣教師によって測量された皇輿全覽図、19世紀中葉の台湾港開港前の地図、開港後の地図、1870年代の牡丹社事件前後の地図、清仏戦争時の地図、1890年代の日本に統治される直前直後の地図、日本統治時代初期の2万分1迅速測図、および編集図などが紹介された。

こうした地図の変遷から、近代測量による地図は国土や人々の統治に寄与してきたことは明らかである。清国時代の地図は伝統的測量法によるため、地形や地勢への追求が不十分であったが、欧米諸国や日本が作成した近代地図によってその地形が明らかにされていく過程を確認することができた。



写真2 魏 徳文氏による説明

③郭 俊麟 (国立花蓮教育大学) : 「Google Earth による外邦図の活用 : 索引図と時空間ナビゲーションの試み」 (提案)

まず、Google Earth 使用開始前の準備・確認作業について説明があった。日本統治時代の台湾基本図 (地形図) の全貌を把握するために、発行年・種類・比例尺・帳数・製図機関・原図収蔵単位の項目に着目して整理し、4 つの発行期ごとの索引図と影像接合図を示した。また、復刻版 5 万分 1 台湾地形図について、鮮やかな一覧図を交えながら、1980 年の学生社と 2007 年の上河文化の復刻出版に関する考察が加えられた。終戦まで (1944 年の米軍が調製した地形図を含む) の台湾における 5 万分 1 地形図も比較した。

次に、Google Earth による外邦図の活用事例として 3 つの提案がされた。1 つは Google Earth を共通のプラットフォームとして、日本の外邦図研究者と台湾の GIS 研究者との技術や情報交換を促進し、外邦図の一覧図とコンテンツを編集するというものである。2 つ目に、地域変遷を直感できるプラットフォームとして、Google Earth による地図の時系列的な重ね合わせを活用した、台湾都市の事例を紹介した。最後に、鄭和の西洋航海に関する時空間ナビゲーションや大正時代の花蓮県における日本移民村のバーチャルナビゲーションを事例に、文化・知識を再発見するバーチャルスペースとしての可能性を指摘した。



写真 3 郭 俊麟氏による説明

④故久武哲也 (甲南大学)・鳴海邦匡 (大阪大学)・小林 茂 (大阪大学) : 「室賀文書資料の検討」 (報告)

これまで不明な点が多かった「総合地理研究会」

の活動の全容や軍との関係などにアプローチする手掛かりとして、京都大学・大学文書館に架蔵される室賀信夫氏の個人資料のうち書簡と原稿に着目し、検討を加えた。

特に皇戦会との関係について、1939 年までは皇戦会の財政的な基礎が確立せず、研究を依頼しても長期間経費の支払いが遅延していたこと、皇戦会からの依頼に応じて各種レポートを提出していたこと、さらにレポートの内容は陸軍将校・高嶋に高く評価され陸軍の幹部に紹介されていたことなどが確認された。このような点から、当時の総合地理研究会は今日のシンクタンクのような機能を果たしていたことが推測される。

今後は、資料目録をさらに精緻なものにするだけでなく、クロノロジカルに整理し、画期を検出し、重要なものについては刊行していく必要を述べた。



写真 4 鳴海邦匡氏による説明

⑤懇親会

18 時 00 分より学内食堂「宙 (そら)」で懇親会にうつった。

〈10 月 28 日 (日)〉

9 時 00 分より、中庭会議室にて開催され、以下のような発表が行われた。

⑥長岡正利 (国土地理院客員研究員・国土地理院 08) : 高木菊三郎旧蔵の「地形図記号・図式・一覧表」、「外邦図一覧図・目録・資料」の検討と活用法に関する討論 (コメント)

高木菊三郎旧蔵の地図に該当する地域の 10 万分 1 図という観点と、満州と支那本部における地図作成

とその作成記録としての地図一覧図 (Index Maps) という観点とからコメントがあった。

まず、「一覧図 (表)」は業務用資料のため、系統的な保存の対象とされず、国立国会図書館でも蔵書として扱われていない。「地図図式」や「作業規程」も同様である。冊子体として (海図・航空図を除く)、『北方地区地図整備目録』 (参謀本部、1943 年)、『南方地域地図整備目録』 (参謀本部、1942 年)、『関東軍調製・陸軍秘密地図一覧図』 (関東軍司令部、1941 年)、『支那地域兵用地図整備目録』 (大本営陸軍部、1944 年)、『支那製地図一覧図』 (陸地測量部、1936 年) が例示された。また、他に多数の一枚刷りの一覧図も存在することも指摘された。

次に、満州における地図作成について説明があった。当初はロシア版や中華民国製の地図を代用していたが、明治末期からは必要に応じて「迅速測図」や「目算及記帖測図」を併用するようになり、1933 年以降は関東軍測量隊による現地実測測図も行われていた。

一方、中国本土については、明治末期から大正期にかけて「目算及記帖測図」が主体であり、1934～37 年に東部で民国 5 万分 1 図が、奥地で民国 10 万分 1 図が利用されていたことを指摘した。



写真 5 長岡正利氏による説明

いて整理し、1942 年に敷かれた 48 の満州国地方気象観測台の位置を図示した。続いて、気象庁図書館における満州気象月報の保存状況を概観し、1941 年 4 月以降の気象月報については、日本と中国において保存されておらず未収集の状況にあることを明らかにした。1933～40 年の満州気象月報については、国立公文書館「アジア歴史史料センター」にて電子提供されている。それらのデータを元に、1910 年から 100 年間の瀋陽、長春、ハルピンにおける月平均気温 (1 月・8 月) の推移を折れ線グラフで示し、気温の変化と社会状況について述べた。

米国議会図書館では気象資料の検索・撮影が行われた。その結果、極秘扱いの「満州高層気象月報」 (第 14～18 号、1944 年 6～10 月) や「内南洋気象月報」 (第 14～18 号、1937～41 年) などが発見され、南洋庁における気象観測業務の沿革についてうかがうことができた。しかし、満州気象月報はみつからなかった。

今後は、満州気象月報 (1941 年 4 月以降) の所在を追究するとともに、中華人民共和国建国以降の気象観測業務と資料の状況把握・データの接続や、長期的な気象データベースの構築に基づく温暖化分析といった研究の方向性が考えられた。



写真 6 山本晴彦氏による説明

⑦山本晴彦 (山口大学)・今里悟之 (大阪教育大学)・小林 茂 (大阪大学) : 「ワシントン議会図書館、公文書館の調査について」 (報告)

前半では、気象庁図書館における満州気象月報について触れ、後半で 2007 年 9 月 17～22 日に行われた、米国議会図書館、米国公文書館での、満州・南洋庁における気象観測資料の調査報告がされた。

まず、満州における気象観測業務とその変遷につ

(7) 第 10 回外邦図研究会の開催

2008 年 2 月 10 日に立正大学大崎キャンパス、11 号館 8 階、第 6 会議室で開催した。

出席者 (敬称略・順不同) :

中村和郎、大塚昌利、田村俊和、山本晴彦、佐藤秀樹、清水靖夫、鈴木純子、今井健三、渡辺信孝、渡辺理絵、山近久美子、長岡正利、加藤敏雄、山

本健太、宮澤 仁、関根良平、村山良之、米澤 剛、松岡資明、古市剛久、石原 潤、田中宏巳、小林雪美、長澤良太、司馬愛美子、堀井英夫、高野佳代、楊 普景、小島泰雄、源 昌久、幡田一雄、熊谷 清、大堀和利、中川 透、高村聡史、三木和美、池中香絵、金 美英、小林 茂

①長岡正利（もと国土地理院）「外邦図作製の経緯を記録に留める各種一覧図（索引図）と外邦図の『初刷』一覧」

これまでの研究をふまえ、外邦図の全容を示す資料として、各種の一覧図を紹介するとともに、その利用の必要性を指摘された。また、同様に外邦図の初刷り集成が現存していることにくわえ、その目録としてセットになった『国外地図目録』・『国外地図一覧図』が国土地理院・国立国会図書館・防衛省防衛研究所などに保存されていることなどが紹介された。紹介された一覧図と本年度に購入した高木菊三郎旧蔵の「外邦図一覧図・目録・資料」にふくまれる図との比較についても議論がおよんだ。



写真7 長岡正利氏による説明

②大塚昌利（立正大）「立正大学図書館の外邦図について」

立正大学図書館が所蔵する田中啓爾文庫の韓国・中国の地形図（計約200枚）、石川与吉文庫の東亜輿地図（100万分の1、102枚）、中国（旧満州）の各種地図（計82枚）・朝鮮半島の各種地図（計691枚）、樺太・台湾の地形図（ただし少数）について、報告があった。



写真8 大塚昌利氏による説明

③今里悟之（大阪教育大）・池中香絵（大阪大・院）・岡本有希子（大阪大・院）・小林 茂（大阪大）「（報告）アメリカ議会図書館蔵、日本軍航空偵察写真について」

今里氏欠席のため、池中さんが発表した。2007年9月にアメリカ議会図書館で発見した、日本軍による航空偵察写真集「豪州西北部飛行場要覧」を中心とする、偵察写真について、その目録を示すとともに、特色を検討した。田中宏巳・防衛大学教授より撮影当時の日本陸海軍のオーストラリア侵攻に関連した思惑についてコメントがあったほか、今井健三氏（水路協会）より、海上保安庁海洋情報部図書室にも類似の偵察写真集が保存されているとの紹介があった。また中村和郎・日本国際地図学会会長は、ウィスコンシン大学留学時に日本を戦時中に撮影した空中写真が、教材として使われていたとコメントされた。

④三木和美（大阪大・院）・亀山玲子（大阪大・学生）・金 美英（大阪大・院）・竹内加枝（大阪大・学生）・小林 茂（大阪大）「（報告）高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について」

東京の古書市「明治古典会」で購入した高木菊三郎旧蔵の内邦地図一覧図について、目録を示すとともに、保存状況、特色を検討した。

⑤小林 茂（大阪大）・村山良之（山形大）・宮澤 仁（お茶の水女子大）「外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題」

日本地理学会でひらかれるシンポジウム『地域の知』の統合に向けて：地域情報データベースの利活

用」で発表を予定している内容を紹介し、討論の素材とした。とくに外邦図研究およびそのデータベース化をふりかえって、その問題点と課題を検討した。ウェブで公開するにあたっての技術的な問題（解像度と認視性、保存媒体、緯度経度の記載のない図のインデックス上での表示、特殊な図の表示など）のほか、日本軍が南京などで「鹵獲（ろかく）」した民国製地形図を複製して作製した図などの公開に関連して予想される問題、さらにデータベースの長期的な維持管理についても課題を検討した。

発表の後、佐藤秀樹氏（岐阜県図書館世界分布図センター）より、岐阜県図書館の外邦図コレクションとその閲覧について紹介があった。つづいて堀井英夫氏（アジア歴史資料センター）および松岡資明氏（日本経済新聞）より、今後公文書館制度の見直しがおこなわれる可能性があることとの指摘があった。また、小林雪美氏（国立国会図書館）より、国立国会図書館での外邦図閲覧サービスの特色についてコメントがあった。



写真9 宮澤 仁氏による説明



写真10 佐藤秀樹氏によるコメント



写真11 堀井英夫氏によるコメント

会議終了後、ゲートシティ大崎2Fの「一番どり」で懇親会を行った。

(8) その他の活動

- ①2007年4月26日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ②2007年5月19日、国立国会図書館で台湾・朝鮮半島関係の外邦図の調査（渡辺理絵・小林 茂）。
- ③2007年5月31日、京都大学文書館にて、同人間・環境学研究科の松田 清教授と同文書館の西山伸准教授に会い、同館所蔵の故室賀信夫氏（元京都大学文学部助教授）の個人資料の閲覧と利用について承諾をえた（小林 茂・鳴海邦匡）。
- ④2007年8月23日～30日、中央研究院・中央図書館台湾分館・台湾大学図書館（いずれも台北）で、植民地期の台湾における土地調査事業ならびに中華民国の類似事業に関する資料調査を実施した（小林 茂・渡辺理絵）。旅費は三菱財団の助成金を使用した。



写真12 米議会図書館マディソン館の前で（次頁⑤）
右から山本、太田米司氏（米議会図書館アジア部日本課）、
藤代真苗氏（同目録部日本課）、小林（今里撮影）

- ⑤2007年9月16日～24日、アメリカ議会図書館、公文書館における外邦図・日本軍撮影空中写真・気象観測資料の調査（小林 茂・山本晴彦・今里悟之）。
- ⑥2007年9月20日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑦2007年9月27日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑧2007年10月7日、日本地理学会秋期学術大会（熊本大学）で発表
・岡本有希子・長澤良太・今里悟之・久武哲也・小林 茂「戦中期に日本軍が中国大陸で撮影した空中写真の標定について」（『日本地理学会発表要旨集』72, 59頁）。
- ⑨2007年10月12日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑩2007年11月2日、京都大学文書館で室賀信夫氏の個人資料の調査（鳴海邦匡）。
- ⑪2007年11月20日、人文地理学会大会（関西学院大学）での発表
・久武哲也（故人）・鳴海邦匡・石橋 諭・小林 茂「総合地理研究会と皇戦会：初期地政学グループの活動」（『2007年人文地理学会大会要旨集』58-59頁）。
- ⑫2007年11月21日、外務省外交史料館で資料調査（渡辺理絵）。
- ⑬2008年2月6日、国立国会図書館で樺山文庫の資料調査（渡辺理絵）。
- ⑭2008年3月2日～10日アメリカ議会図書館、公文書館における外邦図・日本軍撮影空中写真・気象観測資料の調査（小林 茂・高村聡史・山近久美子・渡辺理絵）。
- ⑮2008年3月12日、京都大学文書館で同館所蔵の故室賀信夫氏（元京都大学文学部助教授）の個人資料の研究に関する会議を開催した（田中宏巳・源昌久・鳴海邦匡・小林 茂）。なお当日、同館の西山准教授は入院のため、人間・環境学研究科の松田教授は所用のため出席できなかったが、資料の一部を閲覧し、今後の資料集の刊行や解説の執筆について話し合った。
- ⑯2008年3月29日、日本地理学会春期学術大会（獨

協大学）シンポジウム「『地域の知』の統合に向けて：地域情報データベースの利活用」で発表
・小林 茂・村山良之・宮澤 仁「外邦図および日本軍撮影空中写真のデータベース化とその課題：戦前期の地域資料の活用に向けて」（『日本地理学会発表要旨集』73, 24頁）。
・山本晴彦・岩谷 潔・張 継権「満州気象資料のデータベース化による中国東北地区の気候変動解析」（『日本地理学会発表要旨集』73, 25頁）。

(9) 研究分担者、久武哲也・甲南大学教授の逝去

2007年7月27日夕刻に、本研究に大きく貢献してきた久武哲也・甲南大学教授が自宅で逝去された。享年60歳であった。2年間の学部長職の任期が終わりかかった2006年春に胃ガンであることが判明し、手術の後は一時期回復するかにみえたが、2007年にはいつて悪化することになり、小康をえて自宅で療養されていたところであった。

外邦図研究における同氏の仕事は大きく二つに分かれ、一方は内外の外邦図コレクションの系譜に関するもので、下記の論文がある。

久武哲也（2005）「日本および海外の諸機関における外邦図の所在状況とその系譜関係」地図情報，25（3）：7-11.

もうひとつは、第二次世界大戦末期に東京在住の地理学者を中心に参謀本部が組織した「兵要地理調査研究会」に関するもので、海外における戦争と地理学者との関係も検討し、その特色を位置づけている。

久武哲也（2005）「『兵要地理調査研究会』について」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科人文地理学教室，5-19.

なお、病床の久武氏に、松田 清・京大教授による、故室賀信夫氏の個人資料が京大文書館へ収蔵されたことを紹介する記事（京都大学文書館だより，8号，2005）を示すと、大きな関心を示した。このた

め、弟子の鳴海邦匡・阪大博物館助教は、同資料中の地政学関係の報告や書簡を撮影し、そのプリントを久武氏に提供した。久武氏はこれを検討して、同氏自身の見解もふくめ、今までのこのグループの理解について、修正すべき多くの点を認め、重要な報告や書簡を収録し、解説を付した資料集の編集を構想することとなった。この関心が、下記の同氏の論文の延長にあることは、あらためていうまでもない。生前同氏は、「戦争と地理学者」を研究テーマの一つにしてきたと語っていたことも思い出される。

久武哲也 (1999, 2000) 「ハワイは小さな満州国：日本地政学の系譜」現代思想, 27 (13) : 196-204, 28 (1) : 60-82.

久武氏の地理学史・地図学史に対する造詣はふかく、また広い視野のなかで対象を理解しようとする態度は、多くの関係者に信頼されており、京都の地政学グループのように評価の容易でない対象についても、その活躍が期待されていた（山野正彦「久武哲也評議員の死を悼む」人文地理, 60 (1) : 96-98, 2008 参照）。私たちは大きな戦力を備えた、心強い同志を失ったことになる。しかし、同氏が生前に病床でこの方面の研究について、いくつか指針を示しておい

てくれたことは、大きな救いである。今後この指針に沿って久武氏の構想の実現に努力するとともに、あらためてご冥福をお祈りしたい。



写真 13 久武哲也氏

外邦図調査に際し、母方の祖母の旧居の近くで
(ハワイ大学正門付近 2002年9月 今里悟之氏撮影)

(文責：三木和美・波江彰彦・小林 茂)